

「人生に必要な知恵」を棚倉町の砂場から学びませんか!?

第3回

砂ラヴ♥ワークショップ

Sand Workshop & Symposium

福島“砂”シンポジウム 棚倉

～砂遊びから子どもの身体と健康を考える～

日時

2018年

10/20(土)～21(日)

会場

ルネサンス棚倉 福島県東白川郡棚倉町

スケジュール 2日目

あさ

朝砂かつ

モーニングSAND

～夜明けから砂場スキルアップをサポートします～

9:00～ 開会 歓迎のことば(湯座一平棚倉町長)

9:15～ 基調講演 ①大震災以降の福島の子どもたち (菊池信太郎)
10:40 ②子どもの身体・動き・健康(眞砂野裕)

シンポジウム (子どもの身体・健康)

- 「体を楽しく動かす」環境づくり(尾形幸男)
- 砂遊びと子ども(河内ひろみ)
- 砂遊びによる保幼小の接続(宗形潤子)
- 砂場環境づくりのポイント(笠間浩幸)
- まとめの言葉(松本市郎棚倉町教育長)
- シンポジウム宣言採択、閉会

12:15～ 終了・昼食

13:00～ 棚倉町ミニツアー(オプションツアー)
又は、白河駅方面への第1便バス出発

ようこそ！「砂ラヴ♡ワークショップ」と「福島“砂”シンポジウム」へ

本日は県内各地、また東京、さらには長野県、鳥取県からのご来場、心より感謝申し上げます。

7年半前の東日本大震災と原発事故により、福島県は一度、砂場を失いかけてました。以来、私たち福島 SAND-STORY は、砂場の取戻しと、単なる取戻しを超える良好な環境づくりや砂遊びのプログラムに取り組んできました。

砂場は子どもたちの様々な発達を引き出す、とても優れた遊具です。しかし近年では、かつて砂場の設置が義務付けられていた児童公園（現在「街区公園」と名称変更）でも、その設置率は5割を切っています。また、保育施設や小学校等においても、必ずしも砂場の効果的な活用がされているとは言えません。今こそ、砂場の復権を、ここ福島から発信していく大きな意義を感じています。

今回は3回目のシンポジウムとなりますが、初めての試みとして、シンポジウム関連企画「砂遊びを心から楽しみ、砂をうんと好きになるような、砂ラヴ♡ワークショップ」を開催し、ごく基本的なサンドアート・スキルをお伝えします。思わず人にも紹介したくなるような楽しい技を、ぜひとも持ち帰って、明日からの保育や学校の授業、子育ての一コマとして活用いただければ幸いです。

また、砂場での遊びを通して子どもはどんな発達の姿を見せるのか、その具体的な様子も、同じ子どもの姿を6年間撮り続けた映像を通して、お伝えしたいと思います。

2日目のシンポジウムでは、大震災以降、福島の子どもの健康と遊び環境づくりに邁進されてきた郡山市の菊池信太郎先生、また東京都から毎月のように運動遊び講習会のために福島県にお越しくださっている眞砂野裕先生の基調講演、福島県体育協会の尾形幸男様はじめ我々 SAND-STORY のメンバーによる提案を通じて、子どもの身体と健康づくりを考えてまいります。

今回の会場となる棚倉町は、私たち NPO がいつも砂場イベントで使用している良質で安全な砂を産出する町です。また、かつての城下町でもあり自然や文化的史跡に恵まれており、滋養豊かな棚倉美泥（たなぐらびでい）で育った美味しいお米や野菜の数々、肌がきれいになる温泉もあります。

そんな素敵な町のお力添えをいただきながら、これまで子どもの遊び環境づくりに取り組まれてきた福島県内の皆さん、また「福島はどうなっているのかな」と心配してくださった県外の皆さんが一堂に会して、未来に生きる子どもたちのことを話し合うことができるのは大きな喜びです。

すべての皆様に心からの感謝を申し上げるとともに、これからもご支援、ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

折しも、正岡子規が「秋雲は砂の如し」と詠んだ、さわやかな季節。

実りの多い2日間となりますように、 **Let's enjoy with Tanagura SAND!**



NPO 法人 福島 SAND-STORY 理事長 笠間 浩 幸
(同志社女子大学)

棚倉町長 湯座一平様より
歓迎のご挨拶

第三回 福島“砂”シンポジウム in 棚倉の開催にあたり、一言歓迎のことばを申し上げます。

本日ここに、「砂遊びから子どもの身体と健康を考える」をテーマに、子どもの成長・発達に欠くことのできない砂場遊びの環境改善と新たな価値創造を通して、福島県の子どもたちの健康と未来づくりを目指して、福島砂シンポジウムが、ここ棚倉の地において開かれますこと大変嬉しく、歓迎申し上げます。

これもひとえに、主催者でありますNPO法人福島SAND—STORYの皆様をはじめ、ご協力いただいている多くの関係者の皆様のおかげであり、心より感謝申し上げます。

さて、棚倉町は、久保田層という砂の層でとれる砂がありとても質が高く、粘土成分やシルト成分のバランスが良く砂場やグラウンドに適しており、さらさらとした触り心地で砂場に入れても固まらず、衣服や手指が泥汚れになることが少ない砂と聞いております。また、適度な粘土成分とシルト成分により、水を加えると砂がしっかりと固まるため、砂遊びやサンドアートで造形しやすいものとなっております。良質で安全な砂を産出する町となっております。

このような砂を活用していただき、今後においても、この砂遊びから子どもの身体と健康を考えるをテーマとしたシンポジウムのような活動によって、さらなる保育や教育などの展開に広がるような事業となりますことにご期待申し上げます。

結びになりますが、本日お集まりになりました関係者の皆様には、益々ご精励くださるようお願い申し上げますとともに、ご参加の皆様方の御健勝を御祈念いたしまして挨拶に代えさせていただきます。

平成 30 年 10 月 21 日



棚倉町
町長 湯座一平

大震災以降の福島の子もたち ～災害後の子どものトラウマケアは遊びから～

菊池信太郎

医療法人仁寿会菊池医院 院長

認定 NPO 法人 郡山ペップ子育てネットワーク理事長

福島の子どもの喪失感

毎年のように日本各地で何らかの災害が発生している。災害が発生した時に、すぐに話題になるのがトラウマケアである。そもそも「トラウマケア」とはなんだろうか？筆者が東日本大震災からのおよそ7年間で実感したことは、トラウマケアの基本は子どもがいる場所、すなわち“生きる居場所”をしっかりと創るということである。子どもにとって安心安全な基地である家庭や、子どもが通う学校・保育施設、遊ぶ場所などが”いつも通り”に戻ることであり、しかも迅速に行われなければならない。子どもや老人が災害弱者と言われる所以は、子どもや老人にとっての居場所の確保が後回しになってしまうからなのであろう。

災害はそれまでの子どもの環境を一気に破壊し、子どもにとっての日常を奪う。その喪失感は、子どもの心と体に確実に影響を及ぼす。福島では津波や地震による人や家屋の喪失ばかりでなく、放射線汚染による子どもの日常生活の変化や遊ぶ環境の喪失、同じ国民から風評や差別をうける国民意識の喪失、そして、様々な要因から激しく揺さぶられた家庭や家族関係の喪失が同時多発的に起きた。

屋内遊び場『PEP Kids Koriyama』開設

震災直後から子どもの活動は屋内に制限された。生活習慣の中で大事な要素である身体を使って遊ぶことがほとんど出来ず、子どもが活動的でない日々を送ることは、運動発達が阻害されるばかりではなく、肥満を助長することが容易に想像できた。

震災からわずか9か月後の12月23日に、郡山市内に東北最大級の屋内遊び場を開設することができた。この遊び場には、子どもに習得して欲しい様々な身体の動作を経験できるような遊具を設置するだけでなく、自らが楽しくもっと遊びたいと思えるような仕掛けを随所にこらした。子どもは様々な動作を数多く経験することによって身体を上手にコントロールすることができるようになり、また反復動作によって動きが洗練化され、持続的に遊ぶことによって持久力がつく。結果として子どもの体力・運動能力がより育まれる。また、多くの子どもと関わって（群れて）遊ぶことによって、コミュニケーションをはじめ社会的な能力、さらに意欲的な心も培われる。本来、こうした子どもの発達段階を考慮した遊び場と遊ぶ機会を社会がしっかりと用意しなくてはならないが、今の日本社会は大人の都合と効率性を重視し、子どもの育つ環境を軽視していると言わざるを得ない。

子どもの『居場所』の創設

年間 30 万人が訪れるこの遊び場では、現代の日本の子どもの様子をつぶさに観察することができ、子どもに関する様々な問題点を拾い上げることができる。身体を思いっきり使って遊びきった子どもの心はとても安定化し、日々の生活習慣も改善していることがわかる。子どもの身体に潜在的に持っている身体を動かしたい、誰かと遊びたいという欲求を引き出し、しっかりと満たすことが重要である。

東日本大震災は多くの喪失感を子どもに与えたが、しかし同時に地域がしっかりと自分たちを守ってくれたという安心感が、その喪失感を軽減するのではないであろうか。災害後ばかりでなく、平時ですら今の日本の子どもの生きる環境はどんどん窮屈になってきている。震災を通して、福島はある意味日本の子どもがおかれている現況を凝縮して認識できた。一小児科医の発案で始まった単なる遊び場であるが、そこで起きている現象は大きなヒントを与えてくれた。遊び場が地域の子どものにとって重要な生活インフラであることだけでなく、社会が子どもの成長発達をどう保障していくのか、子どもにとってより良い居場所をどう創っていくのか、より真剣に考えなくてはならない時期にきている。



工事中の PEP Kid's Koriyama (2011.11.30)



オープニング・セレモニー (2011.12.23)



砂場、三輪車、走れるところ

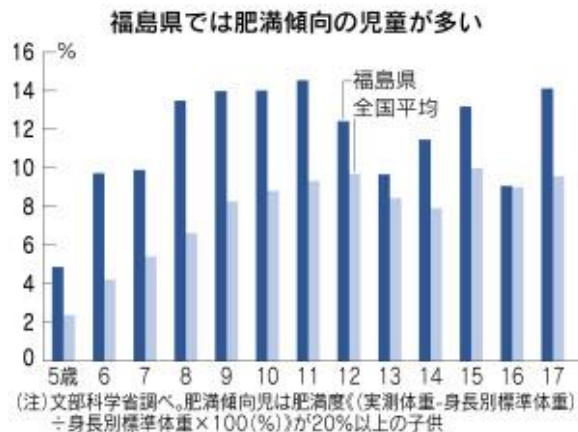
参考資料

「2013/2/23 日本経済新聞 夕刊」は次のように伝えていました。

増える子供の肥満 安心な遊び場 確保急ぐ

屋内施設、体験学習に力

福島県に住む子供の肥満が明らかになったのは、文部科学省が2012年12月に公表した学校保健統計調査速報。都道府県別に12年4～6月時点で肥満児がどれだけ占めるかを調べたところ、福島は5～17歳のすべての年齢で全国平均を上回ったほか、7つの年齢で1位となった。特に小学校低学年で肥満が目立ち、全国平均の約2倍に達した。



運動量減少響く

福島県健康教育課は「放射能を恐れて屋外活動などの制限による運動量の減少や、東日本大震災後の環境変化による生活習慣の乱れなどが原因だ」と分析する。降雪が多い北海道や東北地方の子供は、震災前から肥満の傾向が続いていたが、7つもの年齢で肥満度がトップになったのは初めて。同じ震災の被災地である宮城県や岩手県に比べても目立って増えている。

11年3月の福島第1原発事故で大量の放射性物質が周辺に放出されて以来、県内では子供らの屋外活動を制限する動きが相次いでいる。小中学校の体育の授業では校庭の活動を取りやめて体育館だけに制限したり、幼稚園では屋外にある砂場の遊びを中止したりした。

避難を強いられた18歳未満の子供は原発周辺地域を中心に、昨年10月時点でもまだ約3万人もいる。慣れない避難所生活が続いたほか、仮設住宅に移ってから友達を失って体を動かす機会が奪われたと専門家は分析する。

運動しないまま成長すると健康にも問題が起きかねない。菊池医院(福島県郡山市)の小児科医、菊池信太郎副院長は「基礎体力や運動能力の土台がないまま、運動の最適年齢を迎えてしまう」と指摘する。運動の最適年齢は9～15歳で、ゴールデンエイジとも呼ばれる。子供の体が大人へ成長

する時期で最も体力がつく年齢だ。菊池副院長は「運動せず肥満になれば、生活習慣病になる可能性も高くなる」と危惧する。

福島県は様々な子育て支援策を打ち出している

内 容	主な対象年齢
医療費無料化	18歳以下
屋内遊び場確保	小学生以下
自然体験活動の支援	中学生以下
体力向上のための指導者育成	小中学生
放射能に負けない手厚い保育	乳幼児（6歳以下）
放射能に関する基礎教育の充実	小学生
震災を踏まえた子育て環境の調査研究	乳幼児・小中高生



こうした懸念を減らすため、福島県内では子供が運動できる機会を増やす取り組みが進んでいる。その一つが屋内遊び場の建設だ。

福島県では屋内遊び場が増えている（同県郡山市のペップキッズこおりやま）

郡山駅から歩いて約10分の「ペップキッズこおりやま」。約2千平方メートルの

敷地内にボールプールやランニングコース、水遊びのできる砂場などが並ぶ。屋内遊び場としては東北地方で最大の規模だ。

生後6カ月から12歳が対象で無料で利用できる。昨年12月に開所し、週末には1000人を超える子供が訪れる。時間待ちになる日もある。3人の子供を連れてきた30代の母親は「近くの公園では除染が進んでいないので不安が多い。まだ肥満にはなっていないが、運動不足が心配だ」と話す。

放射線量の低下に伴い、学校での屋外活動の制限は解除されつつあるが、子育てに不安を抱える親は多い。屋内遊び場のニーズはかなり高い。県内ではこうした屋内の遊び場が自治体から補助を受けた施設だけでも38カ所ある。今後も増える見込みだ。

放射線量が比較的低い場所へ移動して運動する機会を増やす取り組みも進む。福島県は、県内の小中学生らを対象に会津地域などでの体験学習に力を入れる。事故から間もない11年7月から始め、延べ30万人以上の子供が参加した。

県はさらに専門家から子育ての総合的な助言をもらうため、研究者らで組織する「こども環境学会」と包括的に連携する協定を今月結んだ。保育園や学童クラブなどで最適な遊び方などを提言してもらう予定だ。

心のサポート重要

同学会評議員の笠間浩幸同志社女子大学教授は「福島県は放射能によるストレスがあり、子育ての総合的な支援が欠かせない」と指摘する。子育てには遊びの空間と時間、生活の仕方、共同体（コミュニティ）などが欠かせない。笠間教授は「大人から見守られながら育ったという実感が子供の成長にとっては大切だ」と話す。

福島県は屋内遊び場などの施設整備だけでなく、精神的なサポートにも力を入れている。原発事故という逆境をバネに、子育て支援を他県より充実して「日本一安心して子育てしやすい県づくり」を実現しようとしている。

[日本経済新聞夕刊 2013年2月23日]

子どもの身体・動き・健康

眞砂野 裕

東京都昭島市立光華小学校副校長、足育研究推進委員

1 お伝えしたいこと

私は、東京都の公立小学校に勤務しています。ご縁あり、この福島はじめ全国で子供たちやその保護者、そして様々な形で子供と向き合う指導者の皆さんに運動遊びを届けてきました。多くの出会いの中で強く感じることは「子供は、小さな大人ではない。」ということです。

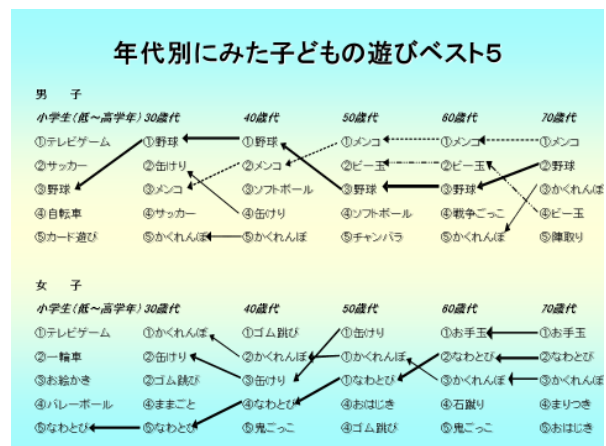
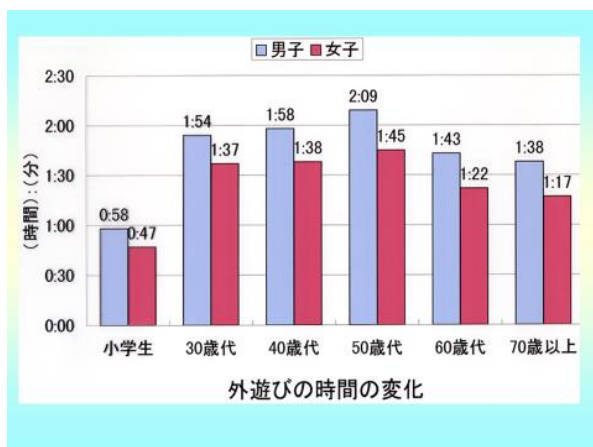
子供の時にしか育たない身体や心を、大人が軽視したり曲解してはいけません。この国を支える子供たちの健やかな育みは、私たち大人の責任です。

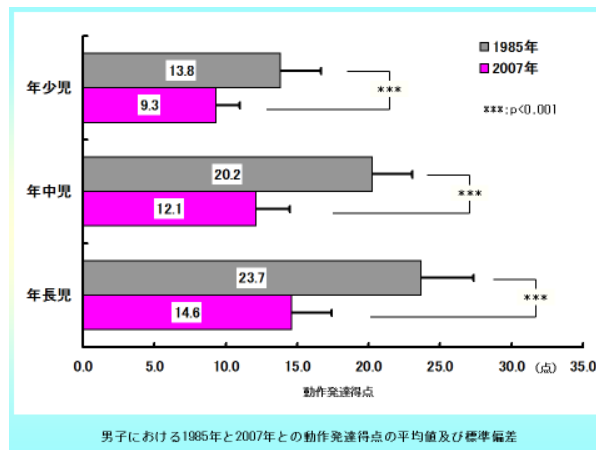
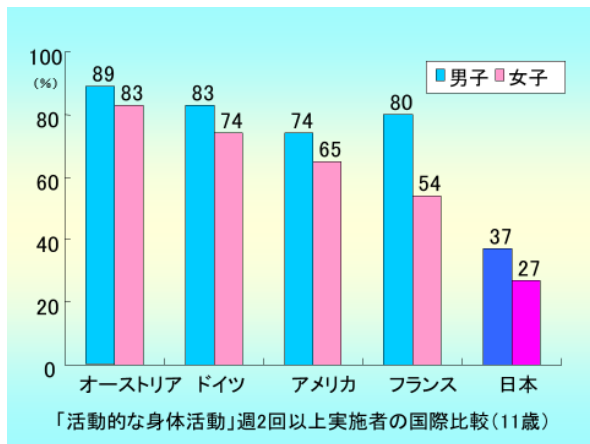
2 今の日本の子供たちは・・・（山梨大学教授 中村和彦先生の研究より）

はじめに皆さんと共有したいのは、子供の遊びに関連した「危機感」です。

馬跳び・ゴム弾跳び・めんこ・ろくむし・・・こうした昭和の遊びはどこへ行ってしまったのでしょうか？私たちがご指導いただいている山梨大学教授 中村和彦先生の研究を紐解きながら、今の日本の子供たちの遊びを「昔の日本の子供たち」「世界の子供たち」と比較していきます。

今、日本の子供たちの身体活動は、世界でも最低レベルなのです





3 では、どうするか？！

① 生活習慣を変える

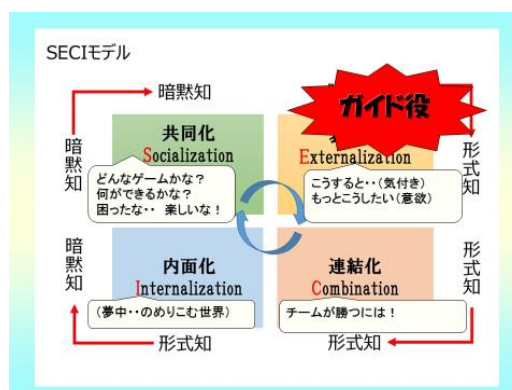
まず、生活習慣からの改善が必要だと考えています。その一つの具体策として私が所属する地区で取り組んでいる活動「グッドモーニング 60分」をご紹介します。

「グッドモーニング 60分」とは？

学校保健会の調査では「起床から登校まで60分確保できている家庭では、子供が眠気を感じにくく、朝食や排便の習慣が身に付いている。」という結果が出ています。この事実を活かし、朝食摂取や就寝時刻への個別指導ではなく、生活時間そのものへのアプローチにより、よりよい生活習慣のサイクルを取り戻そうという試みです。

② 子供の「学び」を変える

子供たちが生きるこれからの日本を考えたとき、少なくとも私たち教師が「学び」の概念を変えていく必要があると思います。経営論である「SECIモデル」をもとにした一つの授業モデルを提示します。



③ 体育の授業を変える

私の専門分野は小学校体育です。運動習慣の二極化が言われて久しい中、体育は(児童から見れば、授業という半強制的な活動として)毎週2~3時間の身体活動の時間です。この貴重な時間を無駄にしないためにも、その運動は子供にとって「何をしているコトなのか?」という視点を教師が持つべきだと考えます。

例えばこの写真。子供が「何をしているコト」ととらえますか?



子供は小さな大人ではありません。

将来を見据え、今、子供たちに何を学ばせるかは大人の責任です。

公益財団法人福島県体育協会事務局長 尾形 幸男

<公益財団法人福島県体育協会事業について>

1 基本方針

公益財団法人福島県体育協会は、競技力の向上と生涯スポーツの推進を二大目標として掲げ、公益財団法人日本スポーツ協会や県・市町村及び加盟団体と連携を図りながら各種事業を推進し、「スポーツふくしま」の確立に努める。

○競技力の向上・・・公益財団法人福島県体育協会は「スポーツに強いふくしま」の確立を図るため、加盟競技団体、福島県中学校体育連盟、福島県高等学校体育連盟、ふくしま広域スポーツセンター等との連携をより密接なものとし、競技力向上へ向けた各種強化事業を積極的に推進する。

【目標】

- 1 フェアプレー精神の涵養と徹底（人間力の向上を目指す指導者・選手の育成）
- 2 第73回国民体育大会 総合成績20位台（競技得点500点以上）
- 3 国際大会・全国大会で活躍する選手の育成・強化

○生涯スポーツの推進・・・県民の誰もが、豊かなスポーツライフを創造できる「生涯スポーツ社会の実現」をめざして、各関係組織・団体と連携し、生涯スポーツ事業の推進に努める。

【目標】

各種事業を充実させ、県民が生涯にわたって自主的・自律的かつ継続的にスポーツに親しむことができるようにする。

2 未就学児に対して

生涯スポーツの推進の一環として「体を楽しく動かす」環境づくりをめざす



(1) 「幼児期運動指針」（文科省 H24. 3）より

- | | | |
|--|---|-----------------|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 多様な動き 2 楽しく体を動かす 3 発達の特性に応じて | } | 1日合計60分の運動機会の確保 |
|--|---|-----------------|

(2) 福島県スポーツ推進審議会委員 菊池信太郎 氏（医療法人仁寿会 菊池医院 院長 菊池記念こども保健医学研究所所長）による「福島県の子どもの肥満傾向推移と肥満度と運動能力の関係」調査結果



これらを受けて、以下の2つの事業を実施

未就学児や親子を対象とした「体を楽しく動かす」機会の提供

事業① あそんで体力アップアップ事業

「幼児体操教室」

目的 県内の未就学児が幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分に行い、多様な動きを身に付けながら体力の向上を図るとともに生涯にわたって健康を維持し、何事にも積極的に取り組む意欲を育むなど、豊かな人生を送るための基盤づくりを進める。

講師 ①こども体育研究所(多様な動き、マット運動等)

②福島県レクリエーション協会

(模倣遊び、忍者遊び等)

③福島県3B体操協会(用具を使った運動)

④福島県エアロビク連盟(エアロビク)

⑤ダンススタジオ vivid(ヒップホップダンス)

⑥福島ファイヤーボンズ

チアダンススクール(チアダンス)

以上の6団体に依頼し、各幼稚園・保育園、こども園が希望する講師を派遣。今年度は41施設へ派遣予定。



事業② 生涯スポーツキャンペーン2018

「親子体操教室」

目的 親子で楽しく運動することを通して、親子のふれあいを深めるとともに親子の健康増進を図る。また、指導者養成講習会により指導者の指導力の向上を図り、子ども達が遊びながら運動能力を向上させたり、スポーツへの興味・関心を高めたりすることができるようにすることをねらいとする。

講師 佐藤弘道氏(元NHK体操のお兄さん)

※ 医学博士でもある立場から親子体操を推奨し、12年連続で講師を担当。県内の親子に体操をとおして、たくさんの笑顔を届けている。今年度は県南地区で実施し、親子総勢310名の申込。



未就学児の運動遊びを日常化し、継続するための指導者の育成

指導者養成講習会の開催(事業①②)

目的 子ども達が遊びながら運動能力を向上させたり、スポーツへの興味・関心を高めたりするための指導者の指導力向上を図る。

事業① あそんで体力アップアップ事業

講師 小林 誠氏(こども体育研究所)

今年度は相双、いわき、会津の3会場で実施予定。

69名の申込。(幼児体操教室実施園の保育士等)

事業② 生涯スポーツキャンペーン2018

講師 佐藤弘道氏(元NHK体操のお兄さん)

今年度で4回目の実施

91名の申込。(県内の保育士や保育士をめざす学生等)

子ども達への実際の取り組みと指導者への指導力向上の両輪から

「体を楽しく動かす」環境づくりを今後も推進

◆「子どもに添い、主体を広げる砂遊び」

◇砂場は、子どもが主人公になれる多様な可能性に満ちたかけがえのない場…

～ 自分が見える・ともだちが見える・みんなが見える場であるということ ～

心が動く・気持ちを起こす（見出す）・自分自身や友だちとの遊びをとことん楽しむ場

◇子どもが蓄えている時間を邪魔しないという意識…～ 一人ひとりの“主体”をどう見取り、どう添っていくか ～

見る・感じる・思う・考えるのは子ども自身

その時間を大事にすることが育ちの歯車を回す原動力に

～ 指導者は大切な環境（人的な）だという意識を持つこと ～

大人の価値観（順序・効率・一方的な評価など）を押しつけない

“遊ばせる”・“遊んであげる”という意識の払拭

・子どもとのいい距離・タイミング・言葉かけ・アクションとは

・漠然とではない“積極的な見守り（見取り）”とは◇子どもの“スイッチ”をどのタイミングで どんなふうに入れていくのか…豊かな時間が豊かな活動を生み、豊かな育ちのベースをつくっていく幼児期→ その積み重ねは、さらなる力を吸収していく学齢期へと受け渡されていく

わたしたちは、子どもたちの人生の根っこに居合わせています
 “添う”ことを意識した時、幸せな宝物はそこらじゅうに散らばり輝いています☆
 ～「記憶の森の住人」になれたらいいですね～

◆「子育て・子育て」「友だちとの協同」「年齢を超えたふれあい・憩い」が叶う良質の砂場を公園に！

～ 砂場に入ると親子は親子でなくなり、夫婦は夫婦でなくなります年齢や性差、間柄を超え、みんなが遊びの仲間になります ～

豊かな時間は子どもの人生の根っこをつくり家族の歴史になっていきます。

また、成長を通じ運動遊びやスポーツへも展開していくでしょう。

そして、「育ち」はやがて、「育てる側」へと世代を超え循環していきます。

かけがえのない家族（人生）の1ページがここに 있습니다！
 子育て・子育ての場である身近な公園に、ぜひ良質な「ファースト砂場」を！

1 はじめに（問題の所在）

小学校の先生方にとっての遊びの中で一人ひとりの子どもを見取ることの難しさ。遊びの中に学びと言っても教科内容に結び付いていることを学びと捉えがち。入学間もない児童に対する幼さが強調されたイメージの固定化。

2 小学校入学間もない子どもたちの砂遊びで姿から

Episode 1 「どうして僕だけ混ぜてもらえないの？」

～子どもは砂場の活動を通してどう自分の居場所を獲得していくのか～

時間が過ぎて行く中で→砂が子どもをつなぎ始める

- ・作りたいものを作る
- ・自然にできるルール
- ・協力の必然性（自然に役割は生まれ助け合うことそのものが喜びとなる）
- ・一人ひとりのよさが見える場
- ・言葉にする必然性
- ・多様であっていい場
- ・言葉にする必然性

Episode 2～砂場とは～「教師が子どもの思いと出会い、心を動かす場」

砂遊びの中で教師は子どもを広く受け止め、新たな子どもに気付いていく

- ・子どもが自由な発想で自分のやりたいことをするのが当たり前
- ・誰か（教師）の言う通りにするのではない
- ・教師は教える人でない（子どもから学ぶ人、一緒に楽しむ人）
- ・多様であっていい場
- ・多様性に気付くことができる場

教師へのインタビューから（砂遊びの教育的効果とは）

試行錯誤しながら学べる材。子どものありのままの姿が見られる。様々な教科等の学びが含まれている。子どもをたくましくする（楽しさが強さに）。関わりや協力を自然に生み出す。幼稚園・保育所とのつながり（教師が手を出さないと見守ることができる場）

入学間もない砂遊びの子どもと教師における価値とは？

入学間もない児童への教師の関わりに大きな影響を与える
 これからの教育で求められていることとの強い結び付き
 保幼小連携の可能性

3 小学校生活科での砂遊びの保幼小連携の可能性

入学間もない子どものよさや特性を捉えるために

子どもが子どもらしくある時間を確保するために

子どものよさや特性を共有するために→深い子ども理解へつながる

目の前の子ども・子どもらしい姿を通して子ども理解、そしてお互いの理解を深める意味

はじめに

かつて倉橋（1913）は、「幼稚園に砂場の必要なことは言ふまでもない。しかし、時によると其の砂場が、土まじりのコチコチになって居たり、砂漠のように乾き過ぎて居たり、殆ど砂場の骸骨とでもいふ様なものがある*」と述べた。

- この倉橋が指摘した問題とは、
- メンテナンスの問題？
 - 砂そのものの問題？

貴園の砂場は、どうなっていますか？

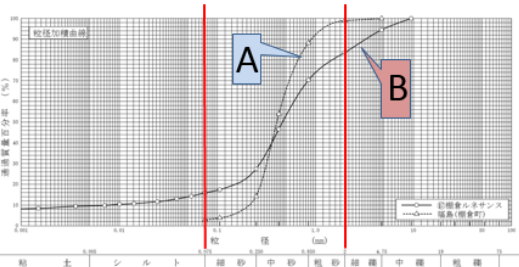
*倉橋三（1913）第13巻7号、245-6（=1979復刻『幼児の教育』所収、日本らいぶらり）

砂場で生じている問題

- ✓砂場全体が固まる
 - ✓手指や衣服が汚れる
 - ✓乾くと埃が立ちやすい
 - ✓造形遊びがしにくい
- つい砂遊びを敬遠
保護者からの不満
砂遊びのマナー化
保育者の負担感増大
- 砂場改善は「砂」から！**

砂とは何か

粒径区分(mm)とその呼び名											
0.005		0.075		0.25		0.85		2		75	
粘土	シルト	細砂	中砂	粗砂	細礫	中礫	粗礫	粗石	巨礫		
細粒分				砂				礫		石分	
				粗粒分				石分			



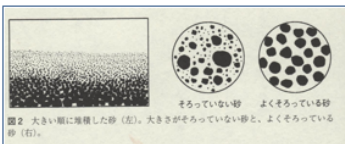
0.075mm～2mmの粒径を持つ粒子。それ以下の0.005mmまでが「シルト」、さらに小さいものが「粘土」。砂よりも大きい2mm～75mmを「礫」、それ以上は「石」と分類される。

（地盤工学会『土質試験 基本と手引き（改訂版）』2010、27）

	粘土	シルト	砂分	礫分 (%)
A	2.0		97.8	0.2
B	9.6	6.3	64.7	16.4

提案：砂場には95%以上の「砂分」の砂が適切（=本物）

砂の堆積と精製工程



（Welland, M. SAND（2009:19）（=2011 林『砂』築地書館）

洗いとふるいによって「適切な砂」が誕生

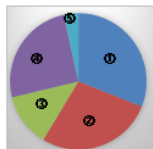
「適切な砂」での保育者WS



2017年8月1日、福島市にて、県内の保育者135名を対象に実施。2種類のアンケートに、延べ70名、項目として87の「適切な砂」についての記述があった。

保育者アンケートの結果 (%)

- ① 砂の感触への驚き (31%)
- ② 自施設の砂との違い (28%)
- ③ 遊びの広がりの可能性 (13%)
- ④ 自施設改善への願い (25%)
- ⑤ 具体的な入手法 (3%)



砂質が全く違い、大人も砂遊びに夢中

「適切な砂」による変化・改善



- ◎ 子どもの遊びの内容と時間、頻度に変化があった
- ◎ もう公園の砂では遊びたがらない
- ◎ 保育者の負担減、保護者にも好評

まとめ

砂場に適した砂（本物）を導入することにより、砂場での保育活動は、よりその可能性を広げる。

色々な砂場



テラスの下にある砂場



ニュージーランド



コンテナを改良した砂場



デンマーク



福島学院大学附属幼稚園のコンテナ砂場



京都府向日市まこと幼稚園



お父さんたちも楽しい



「花は咲く」

1. 真っ白な 雪道に 春風薫る

わたしは なつかしい あの街を 思い出す
叶えたい 夢もあった 変わりたい 自分もいた
今はただ なつかしい あの人を 思い出す
誰かの歌が聞こえる 誰かを励ましてる
誰かの笑顔が見える 悲しみの向こう側に
花は 花は 花は咲く いつか生まれる君に
花は 花は 花は咲く いつか恋する君のために

2. 夜空の 向こうの 朝の気配に

わたしは なつかしい あの日々を 思い出す
傷ついて 傷つけて 報われず 泣いたりして
今はただ 愛おしい あの人を 思い出す
誰かの想いが見える 誰かと結ばれてる
誰かの未来が見える 悲しみの向こう側に
花は 花は 花は咲く いつか生まれる君に
花は 花は 花は咲く わたしは何を残しただろう

花は 花は 花は咲く いつか生まれる君に
花は 花は 花は咲く いつか恋する君のために



第3回「福島“砂”シンポジウム in 棚倉 2018」は 宣言します！

砂場はもっとも身近にある自然素材に満ちた遊び場であり、子ども本来の活動的な姿を受け止め、子どもたちの健康な心と身体を育む、大切な遊び環境です。

第3回「福島“砂”シンポジウム in 棚倉 2018」では、子どもの遊び環境を守り、子どもの遊びをより充実させていくことの大切さを、改めて色々な観点から確認することができました。

東日本大震災から7年半の今、私たちはこれまでの経験と学びをもとに、福島の子どもたち、そして日本全国の子どもたちに、安心安全な砂場環境と遊びの楽しさを届けることができるよう、次のことを宣言します。

- のしい砂遊びから、子どもの健康な心と身体を育てます。
- んかいも遊びたくなる、本物の砂による砂場環境づくりを目指します。
- たいてきなサンドアートスキルから、保幼小中接続の新たな可能性を拓きます。
- いねんも更なる展開を全国にお伝えできるよう、「砂の遊びとアート」プログラムのより積極的な推進を図ります。

2018年10月21日 第3回「福島“砂”シンポジウム in 棚倉 2018」
及び関連企画「砂ラヴ♡ワークショップ」参加者一同

第3回「福島“砂”シンポジウム in 棚倉 2018」及び関連企画「砂ラヴ♡ワークショップ」の開催にあたっては、多くのご支援と皆様のご参加をいただきましたことに、心より御礼申し上げます。

■共催：棚倉町、棚倉町教育委員会、ルネサンス棚倉

■協賛：ヨークベニマル文化教育事業財団、コープ共済地域ささえあい助成、HARIO（株）、LUSH

■後援：福島県、福島県教育委員会、公益社団法人こども環境学会、NPO法人郡山ペップ子育てネットワーク、NPO法人いわき鳴き砂を守る会、IPA（子どもの遊ぶ権利のための国際協会）日本支部、こども環境研究会関西、福島民報社、福島民友新聞社、朝日新聞福島総局、読売新聞東京本社福島支局、毎日新聞福島支局、NHK福島放送局、福島テレビ、福島中央テレビ、福島放送、テレビユー福島、ラジオ福島、エフエム福島



NPO 法人 福島 SAND-STORY

〒960-8164 福島市八木田字神明 94 番地

アドプロダクション内 Tel. 024-545-7779 Fax. 024-545-7888

URL : <http://fukushima-sand-story.com> eメール : info@fukushima-sand-story.com

「人生に必要な知恵」を柵倉町の砂場から学びませんか!?

砂ラヴ♥ワークショップ

新刊

乳幼児期の砂遊び

2011年10月制作

新刊

全2巻 DVD・VHS
各巻40分



砂遊びは子どもの発達に大きな役割を果たしています。

保育園では8～9か月ほどの乳児たちが、人生における初めての砂との出会いを体験し、劇的な遊びの変化を見せていきます。

1歳児期の特徴は「砂で遊ばない砂遊び」。手にスコップやプリンカップなどをもち、「もの」の操作を楽しむ砂遊びに没頭します。やがて、腕の力がつき、手指の動きがなめらかになってくると、砂山をつくってトンネルを掘ったり、ていねいに泥だんごを丸めたり。言葉の増加とともに、砂でつくったケーキのやりとりをするなど、いろいろな「ごっこ遊び」が広がっていきます。

一方、4、5歳児期には、遊びのイメージはどんどん広がるものの、ありきたりの砂遊びにやや停滞を見せる時期があります。そのため、砂遊びは幼児期前半の遊びだと言われることもありますが、決してそんなことはありません。適切な保育者の関わりがあれば、子どもたちみんなが力を合わせて役割分担をしながら、砂場全体に大きなイメージを創り出す大胆な砂遊びが現れます。

この作品では、乳幼児期の砂遊びについて、いくつかの発達の視点を提起しながら、子どもにとっての砂遊びの意味と保育における援助のあり方について見ていきます。

第2巻は、同様の視点による、一人の女兒の11か月から6歳に至るまでの長期にわたる砂遊びの観察記録です。幼稚園・保育園におけるごく普通に見られる遊びの中に、子どもの発達と保育のポイントを探り出す貴重な作品です。

179 第1巻 砂遊びから見る子どもの発達

- 砂場の歴史
- 砂との出会い
- 砂で遊ばない砂遊び
- 砂で遊ぶ砂遊び
- イメージと言葉を広げる砂遊び
- 多様な素材を広げる砂遊び
- 遊び空間としての砂場
- イメージを共有する協同的砂遊び

180 第2巻 あいかの砂遊び - 5年11か月の記録 -

- あいか11か月、初めての砂遊び
- 1歳児期の砂遊び（「もの」で遊ぶ砂遊び）
- 2歳児期の砂遊び（砂の変化を楽しむ砂遊び）
- 3歳児期の砂遊び（仲間との関わりと「ごっこ」を楽しむ砂遊び）
- 4・5歳児期の砂遊び（イメージの広がり遊びの模索期）
- 遊びからアートへ
- 保育園最後の砂遊び（「エルマーのぼうけん」の世界へ）

監修・指導：同志社女子大学現代社会学部 教授 笠間 浩幸

取材協力：社会福祉法人 花立かがやき会 中立保育園（京都市）